

重症心身障害医療の継承と、 これからの重度重複障害児者医療・医学

座長 宮野前 健[†] 嶋 大二郎^{*}第70回国立病院総合医学会
(平成28年11月12日 於 沖縄)

IRYO Vol. 72 No. 5 (210-211) 2018

要旨

セーフティーネット医療と位置づけられている重症心身障害医療の現場は、利用者の高齢化や Post-NICU・PICU 児の受け入れにともなう医療ニーズの増大、それを支えるマンパワーの不足や育成などさまざまな課題に直面している。さらに地域から求められている在宅支援においても、その役割の重要性が増している。また、これまで経験に基づく重症心身障害医療から、より根拠に基づく重症心身障害医療の臨床研究の必要性も高まってきた。このような背景のもと、「重症心身障害医療の継承と、これからの重度重複障害児者医療・医学」と題したシンポジウムを開催した。

キーワード Post-NICU・PICU, 医療ニーズ, 在宅支援, 障害者医療, 臨床研究

重症心身障害医療は、昭和40年代に旧療養所の結核医療の“後継医療”の一つとして取り入れられ、半世紀近くが経過した。平成16年の国立病院機構に再編成後はセーフティーネット医療として位置付けられて今日に至っている。この間重症心身障害医療の進展や現場スタッフの高い専門性を持った取り組みにより、利用者の予後の改善とともに高齢化が進み、病棟現場ではさまざまな課題が出てきている。また、人工呼吸器管理など医療ニーズが高い Post Neonatal Intensive Care Unit・Pediatric Intensive Care Unit (Post-NICU・PICU) 児への対応や、複雑な病態生理を示す合併症・併発症の増加など、重症

心身障害医療は幼児から高齢者まで一般医療の延長線上では対応が困難な状況となり、高い専門性や技術が必要な医療分野となった。さらに障害者総合支援法が施行され、18歳以上の利用者に対して重症心身障害病棟は福祉の法体系に規定される療養介護事業に移行した。この法律の基本となる障害者が求める生活・社会参加支援の視点、さらに障害者差別解消法や虐待防止法など福祉の視点での対応が求められる時代になっている。また、国立病院機構中期計画にある、在宅重症心身障害児者やその家族への支援を含め福祉職や療養介助職など多職種による連携が必要な時代となり、旧療養所時代とは大きく変化

国立病院機構南京都病院 小児科 *国立病院機構富山病院 小児科 †医師
著者連絡先: 宮野前 健 国立病院機構南京都病院 院長 〒610-0113 京都府城陽市中芦原11番地
e-mail: miyanomt@hosp.go.jp

(平成29年8月29日受付, 平成29年10月13日受理)

The Succession and Future of Severe Motor and Intellectual Disability (SMID) Medicine in National Hospital Organization

Takeshi Miyanomae and Daijiro Shima*, NHO Minami Kyoto Hospital, *NHO Toyama Hospital

(Received Aug. 29, 2017. Accepted Oct. 13, 2017)

Key Words: Post-Neonatal Intensive Care Unit・Intensive Care Unit (Post-NICU・PICU), medical needs, support for the person with SMID at home, disable medicine, clinical research

した。

その背景に超未熟児や新生児仮死、先天奇形など多くの子供たちの命を救える時代になり、Post-NICU 児・Post-PICU 児を含む超重症児（者）も増加し、医療ニーズの多様化・複雑化が進んだ。またそれを担う人材の不足や、高齢化にともなう多彩な合併症や悪性疾患など自施設の医療分野を超えた医療の提供が必要となり、重症心身障害医療の現場は新たな局面を迎えている。さらにこれまで現場の経験に基づいた医療や療育の積み上げから、客観的な評価に耐える質の高い臨床“研究”推進や、セーフティーネット機能としてPost-NICU 児への取り組みや在宅支援が、国立病院機構の大きな目標となっている。

このような背景のもとに、沖縄での第70回国立病院総合医学会で「重症心身障害医療の継承と、これからの重度重複障害児者医療・医学」と題した重症心身分野のシンポジウムを開催して、現場の重心医療を担っておられる各シンポジストに以下の立場から発表をしていただいた。

(1) 臨床の現場から医療ニーズの多様化の現状と問題点（南京都病院 徳永修先生）と、(2) 内科の立場から高齢化にともない必要とされる医療の変化と課題を（大牟田病院 川崎雅之先生）、(3) 障害者医療の不平等を「がん医療へのアクセス」の面（福岡病院 本荘哲先生）から、(4) Post-NICU 児への取り組みと在宅支援や長期入院を含めシームレスの支援システム構築について（下志津病院 山本重則先生）、また(5) 深部静脈血栓症の臨床研究を通じて重症心身障害医療の研究面での課題（柳井医療センター 大森啓充先生）と続け、国立病院機構における課題とこれからの重度重複障害児者の医療・医学の方向性について広く議論を行った。

今回それぞれの立場からシンポジウムの講演内容

のまとめと上記視点からの重心現場の現状と今後の方向性を述べていただいた。この報告が、各施設での重症心身障害医療への取り組みや将来のあり方を考える参考になれば幸いである。なお今回は(5)の大森先生の「深部静脈血栓症の臨床研究を通じて重症心身障害医療の研究面での課題」に関しては、深部静脈血栓症の研究内容に関して、すでに別誌に投稿¹⁾²⁾されていたためこの特集には加えることができなかった。その発表の中で疾患をターゲットとした重症心身障害分野の臨床研究は、対象者の多様な基礎疾患や複雑に絡み合った合併症の存在、また障害ゆえの介入試験の困難さを指摘された。また現場の日々の医療、療育の質の向上に関する研究、さらに療養介護事業における社会医学的な研究の必要性も議論となった。

〈本論文は第70回国立病院総合医学会において「重症心身障害医療の継承と、これからの重度重複障害児者医療・医学」として発表した内容を座長としてまとめたものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし

【文献】

- 1) 大森啓充, 金岡 保, 山崎雅美ほか. 重症心身障害児(者)における DVT の特性からみた臨床的検討 静脈学 2017 ; 28 : 29-34.
- 2) Ohmori H, Nakamura M, Kada A et al. Multicenter, open-label, randomized controlled trial of warfarin and edoxaban tosylate hydrate for the treatment of deep vein thrombosis in persons with severe motor intellectual disabilities 2018 ; The Kurume Medical Journal. (印刷中).